
わたしの魔法使い

咲笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしの魔法使い

【Nコード】

N7495B

【作者名】

咲笑

【あらすじ】

小学2年生になる女の子は、いじめにより髪を切られた。しかし、偶然出会った美容師は、彼女にとって忘れられない存在となると同時に、魔法使いのような人だった。

1998年8月13日14時過ぎ、わたしはひと気のない狭い通りを泣きながら歩いていった。

すると、目の前の白い建物の扉が『カランカラン』と音を立てて開いた。中からは、とてもキレイなお姉さんと男の人が出てきた。

男の人はお姉さんを見えなくなるまで見送ると、泣いているわたしのところへ来て、目線を合わせるようにしやがみ込んだ。

男の人は、わたしの肩まで伸ばした髪を手で梳きながら、「髪の毛、どうしちゃったの？」と尋ねた。

その声はやさしくて、とても心地よかったのを覚えている。クラスの子にいじめられ、切られたと言うと男の人は、わたしをひよいっと抱き上げ、白い建物へ入っていった。

そこには大きな鏡が何枚もあって、鏡の前には見たこともない少し変わった椅子がきれいに並んでいた。

男の人はわたしを奥から3番目の椅子に座らせると、わたしに大きなエプロンのようなものをかけ、「今から、とびつきり可愛くなる魔法をかけてあげるからね」と言った。その言葉が今でも耳に残る。

腰にかけた、革でできた小さなポーチのようなものから、くしゃ

たくさん種類のハサミが顔を出していた。

その中から一つハサミを選び取り、不揃いになったわたしの髪をどんどん切っていく。

その手の動きは、まるで魔法使いが「秘薬」を作る鍋にカエルやらコウモリやら蝸牛やらヤモリやらを入れ、仕上げにマジック・タクトをひと振り、ふた振りするのを盗みみるようで目が離せなかった。

わたしの肩まであった髪が、少し短くなった。

そして、最初に男の人が言ったように、可愛くなっていた。

「お姫様、お気に召されたでしょうか？お気に召されたようでしたら、私に素敵なお顔を褒美としてくださいな。」、そう言った男の人の顔はとてもきれいな笑顔で、わたしは釣られて笑ってしまっ

白いお城の外に出ると、まるで世界が変わったかのようにキラキラして見えた。男の人はわたしに、「きみは可愛いから、モテモテになるよ。そして、大人になったらまた僕に、きみの髪を切らせてくれるかな？」といい、手を振って見送ってくれた。

いま、白いお城は取り壊され、車が10台ほど入る駐車場になっている。

いろんな美容室に通い、思ったことがひとつだけある。『美容師さん』というのはみんな、いつになっても”わたし”の魔法使いさんなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7495b/>

わたしの魔法使い

2010年10月21日22時29分発行